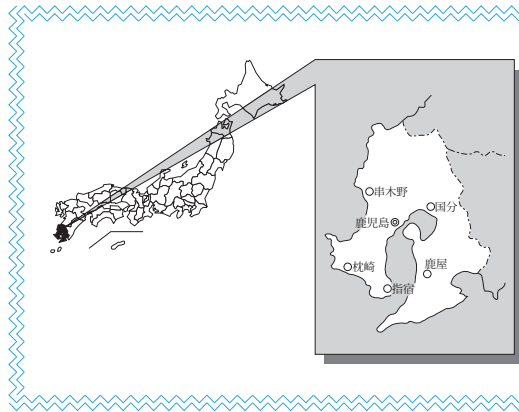


土木紀行

長崎堤防

鹿児島県薩摩川内市高江町



長崎堤防と2人の偉人

タイではチャオプラヤー川流域の洪水がなかなか治まらない(2011年11月現在)。日本の河川では考えられない状況である。明治時代の有名なお雇い外国人デ・レイケに「川ではない。滝だ」と言わしめたほど水は激しく流れている。ご多分に洩れず、鹿児島県を西に流れ東シナ海に注ぐ川内川も頻繁に牙をむく川であった。この川は熊本県の白髪岳を水源とし九州第2位の長さ(126km)を誇っている。長崎堤防はこの川の河口より約4km上流の左岸の高江町に造られている。

長崎堤防とその関連で特筆すべきは、その形状のユニークさと難工事を担当した人物、さらには竣工後の登場人物である。前者は小野仙右衛門(宮崎県にある墓には「仙」でなく「千」と彫られているが、一般には「仙」が用いられている)、後者は甲突川五大石橋の構築で有名な岩永三五郎である。

小野が高江に入ったのは延宝7(1679)年のことである。普請奉行として送り込んだのは第19代島津光久であった。その頃の小野は普請の副役と

して薩摩藩内を巡り、各地で「川溝を直し、切抜井戸を開き、荒廃村を再興し、新田を開拓して」¹⁾いたようである。これらが藩主の目に留まり御沙汰書が下った。61歳であった。

着任した頃の高江は「親が言うても高江にやいやよ 高江三千石火の地獄」と歌われた地域であった。川内川や支流の八間川による洪水によって田圃が頻繁に壊滅するという災害地帯であった。八間川との合流地点に築堤し、洪水から田圃を守ろうという試みが繰り返されていた。その場所は密貿易の唐船が繫泊したという口碑が残っている地点で、水深もあったであろう。この地に築堤することは当時の人力による工事を思えば至難の業であった。神秘的技能を有していたとも評価されている小野をもってしても、足掛け9年の歳月を要している。完成間近になると梅雨・台風などの大雨により無残に決壊していったからである。

築堤の転機は9年目であった。小野が濁流に縄を流し、その流れによる形状を見ると7つの弓を連ねた形をしていた。縄を用いて水の流れを知る閃きをどのようにして得たかは定かではないが、祈願による夢枕に啓示があったと言い伝えられて

いる。この年に袈裟姫(小野には6人の子供がいてその5番目の末娘)が洪水により亡くなっている。享年17歳とのことであるから、大人の判断ができていたはずである。不注意で洪水の被害者となるのは考えにくい。急激な増水に巻き込まれたということも考えられるが、袈裟姫の人柱伝説というの残されている。袈裟姫が自ら人身御供となり、捜しに来た



図一 長崎堤防位置図(国土交通省九州地方整備局)



写真一 長崎堤防 上空からの写真
(国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所)

小野翁が水面に浮いている袈裟姫の帯を見て閃きを得たとの言い伝えである。案外、この伝説は的を射ているかもしれない。

縄の形状に沿って杭を打ち、石を運んだ。わが子を亡くすという悲嘆の中で工事が行われたのであろう。村民の全面的な協力もあったと思われる。娘の犠牲を経て貞享4（1687）年に完成した長崎堤防は、鋸の刃（歯）のような三角形の突起を持つユニークな形状をしていた。刃の1つ1つが徐々に水勢を抑える効果を発揮することを狙っていたと思われる。人間の知恵が自然と共生できることを示した先例と言えるかもしれない。

木曾川の宝暦治水工事に先行すること68年であった。今年で320年以上経過しているが、現役で雄姿を横たえている。堤長は360間（655m）で、石積みは切り石積み3カ所（高さ3.3m、突起長10.8m。小さな刃がもう一つ上流にある）、間知積み5カ所（高さ3.5m、突起長10.2m）となっている（後年、改修工事で石の積み直しが行われたのではないと思われる）。長崎堤防により300町歩（300ha）の新田が誕生した。川内川による洪水の脅威を受けなくなったのである。

長崎堤防に関する話はこれで終わりではない。新田で安定して農業を行うには八間川の治水も必要であった。これを行ったのが岩永三五郎であった。岩永による治水工事の完成は嘉永2（1849）年のことであった。岩永は「新たに用水溝を設け、一の口の眼鏡橋、中の端橋の水門を構築し、門扉を建てて開閉を便にし、八間川の堤防を築くこと一里一町、高さおおよそ丈余、大小水道を修築して悪水は自ら搬出されるに至り」¹⁾という工事



写真二 長崎堤防 上流側からの写真
(鹿児島大学理工学研究科 二宮公紀)

を2年ほどで行っている。長崎堤防完成から、162年後のことである。川内川からの脅威と八間川からの脅威の両方が解決されたことによって、高江町に本当に安心できる水田地帯が完成したことになる。高江の新田は小野仙右衛門が生み、岩永三五郎が成人にしたといえるだろう。

高江の人々は小野の功績を忘れることなく子孫（9代目卯一氏）を捜し出し、昭和28（1953）年に小野翁の顕彰の劇をささげている。このときの卯一氏の手紙によると、大正14（1925）年に小野仙右衛門の250年祭が実施され、卯一氏の父親も招待され、玄米3俵を贈られたそうである（その後、戦災で音信不通になってしまっていた）。高江町にある小野神社と顕彰碑を見ても、小野に対する敬拝の念が如実に表れている。

最後に一つだけ追記しておくことにする。『高江村郷土誌』²⁾には岩永が薩摩で殺されたとの2通りの伝聞が記載されているが、無事に熊本に帰郷し、その後現在の和歌山県に出向き石橋を構築したという資料が近年見つかっている。恩人を殺害するなどという行為は日本民族のように受けた恩を忘れない人々の行為として違和感を覚えていたが、間違った伝聞だったのである。

【参考資料】

- 1) 『高江村郷土誌』、高江村・高江村教育委員会発行（昭和28年6月）
- 2) 『鹿児島県川内郷土史 下巻』、p. 567
- 3) 『川内地方を中心とする郷土史と伝説西薩摩の民謡、鹿児島県川内中学校編』、p. 270（昭和11年）
- 4) 『川内市文化財要覧』、川内市歴史資料館、p. 316（昭和60年）

【参考データ】平成23年度 選奨土木遺産（土木学会認定）

【施設管理者】国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所

【監修】鹿児島大学理工学研究科准教授 二宮 公紀